

知られざる木々の優れた生命戦略から
心豊かに「生きる」を切り開く

ためにもなる

ちょっと、いい気になる木の話

じゅりんの書

ガンコ山マスター
平賀義規



言い訳もせず、すべてを受け入れて生き抜く木々への尊敬と愛情を込めて

～ 木々の世界 ～



木々は、己の生き方に後悔も反省もしないし、迷いもしない。
ただ、己の気質に従い様々な困難、苦難を乗り越えて生きていく。

しかし、そこには、己の気質を最大限に利用して、
生き抜き、遺伝子を伝えていく優れた生命戦略がある。

木々の哲学

与えられたミッション すべてに優先するもの

木々に与えられた最大のミッションはより多くの遺伝子を残すことだ、そのために生き残る … それが本能だ。形あるものは、いつかは、その形を失う。長大な生命力を誇る木もそうだ。それは木々を中心に様々な生命が集まる森とて同じだ。



長い自然界の歴史では、山火事や洪水、台風、さらには人による伐採、山焼きなどで、いつかは木も森もその形を失う。しかし、形を失うこと

が死を意味するのではない。ひとつの終わりは、ひとつの誕生を意味する。木々は形のある間に、種子という形で大量の遺伝子情報を土の中に埋め込む。失われないのは遺伝子情報という記憶だけだ。それこそが生命の核だ。情報として伝達された遺伝子の力により、森はリセットされ再び生まれ変わる。そして、いつかは、また形を失う。形を失っては、また新しい森ができる。形は失っても遺伝子の流れだけは絶やさない。それが木々に与えられたミッションだ。

戦略 「気質」に従うが一番健康

戦略とは、すなわち己が気質を知り、それを最大限に生かすことである。常緑樹は、落葉樹のような生き方しはしないし、落葉樹も常緑樹のように生きようとはしない。

陽の光を大量に必要とするもの、逆にそれほどの陽の光がなくてもよい耐陰性の強いもの、乾燥や湿度、土壌など木々が生きていくには、様々な条件や制約が課せられる。そのどれにも、束縛されないオールマイティーなスーパーツリーというのは存在しない。だからこそ木々は戦略をもって生きている。

明るさを求めるアカメガシワは、その発芽において、シイの大木が占領して葉が生い茂る暗い森での発芽を決して行わない。シイも、明るい森でアカメガシワのようなパイオニアプランツ(先駆種という)がいるところでは発芽しない。

木は生き残っていくために、己の種族の気質に従い得意とする場所で勝負する。それは、太古の昔から引き継がれてきた遺伝子という情報の記憶による。これを「気質」という。その気質を直すことはできない。だから「気質の合わない」ところでは、勝負しない。それが戦略の原則だ。

氣質の合うところがなければ、氣質の合うところができる日まで、待てばよい。「氣質」、人間は、これを、しばしば「長所、短所」と飾り立てるが、木にはまったく無意味だ。
ただ己が「氣質」に従い、それを生かし生きていだけだ。それが、一番健康で長寿につながる。

アカメカシワの感想　日射のあるところでは抜群の発芽力と成長力を誇るが、陰にはめっぽう弱い
木々には、生きていくのに数多くの制約や障害が課される。日射　土質　乾燥　風　塩分　雨　それにすべて打ち勝つオールマイティーな木なんて存在しない。制約や障害に勝つためには、ひたすら己の氣質の強み部分を磨き、短所部分を直したりなどしない。長所と短所の収支が合わなくなったとき、木は枯れていく。

我、変節を嫌う　木は、なぜ「木という形」の長寿にこだわるのか。

木は、どの生命体よりも、抜群の長寿力を誇る。
木が長きにわたり、「木という形」の生命保持にこだわるのは、遺伝子の製造機関としての役割だけではない。「木」は「氣」なり、すなわち己が「氣質」を貫き通すために、「木という形」の長寿にこだわる。
生命体の世代交代とは、外的環境の変化の脅威に対応するための自己変化による防御策だ。
人間は、それを「進化」というが、それには大きなエネルギーが必要だ。動かぬ木々は、頻繁な世代交代による自らの変化を好まず、「進化」に使うエネルギーを節約して、長寿に向かうエネルギーに使った。
そうすることで、外的環境の変化に動じない力を持つに至った。「木」は「氣」なり。己が「氣質」という武器を信じて、それを磨き、どこまでも生き抜く。木は、「進化」という常識を否定した。
木は、大量の遺伝子を製造するためにのみ、長寿にこだわるのではない。己が「氣質」を変節させずに、遺伝子を伝えていくことに、こだわるから長寿なのである。

営み　自他一如に徹する。

今日の一日は、昨日とも違うし、明日とも違う今日だけの一日、今だけの一瞬だ。木々はどこへも逃げず、すべてを肅々と受け入れて生きる。
起きてしまったこの一瞬をやり直すこともできないし、言い訳も反省もしない。
一瞬一刻、太陽、雨、風、暑さ、寒さ、外敵、協力者それらの変化に揉まれ、変化に耐え、変化を利として、生き抜く。
動くことのできない木々は、日々、外的環境や他の生命の影響のすべてをかぶらなければならない。

ならば、いっそ己の掌にすべてを飲み込み、そのエネルギーを自由に転がしてみよう。耐えるのではない。外敵とは闘わない。アオムシが葉を喰いたければ、喰えばいい。喰わして、肥やして、鳥を呼ぶさ。鳥は、アオムシを喰う、褒美に美味しい実をやる。鳥はそれを喰い、種子を糞として散布する。

決して、目の前の敵に動じて、エネルギーは使うまい。

木々にとっての営みとは、すなわち自他一如に徹して生き抜くことだ。そして、最後に笑う。

宿命あるいは輪廻 廻る命



森の世界の特徴は廻りだ。その森の主演はもちろん木々だ。

森の始まりのファーストステージをパイオニアステージという。

長い自然界の歴史では、山火事や洪水、台風、さらには人による伐採、山焼きなどで、いつかは森も、その形を失う時が来る。しかし、それは死を意味するのではない。森がゼロに戻った状態、リセットされた状態だ。ゼロとは可能性のスタートだ。

明るくなった地には、最初に栄華を誇る樹木群が現れる。これをパイオニアプランツ(先駆種)という。フロンティア精神に溢れ、明るい地でお日様の光をいっぱい浴びて、高い光合成力で早く成長する。そして、たくさんの遺伝子を生産し散布する。彼らは皆、落葉樹だ。光合成で生きる木々にとって空間の確保こそが、他者との競争に打ち勝って生き残っていく道である。しかし、そこではもうひとつ、はじめから、それほどの日当たりを求めなくとも省エネで耐えていく道がある。常緑樹はそういう能力が優れている。だから、多少暗くても確実に成長する。落葉樹は明るい陽当たりという条件がある限り速く成長しつづけるが、その条件が満たされなければ、生命力は落ちていく。

やがては、後から来た常緑樹に凌駕されていく時期が来る。そして、生き残るべくして生き残った木だけになる。シイの木、カシ、タブなど常緑樹が優占種となって残っていく。この状態をクライマックス(極相林)という。この移り変わっていく過程を遷移という。しかし、盛者必衰の如く、長い年月の中では、やがては、その極相の形も消えていく時が来る。だが、森の形を失っても生命としての森は死ぬことはない。

再び先駆種が日の目を見る時代がやってくるのだ。前時代の先駆種たちがその種子を、再び日の目を見るまで、土中で何百年と種子のまま眠っていることができるように仕掛けてあったのだ。

チャンス到来となれば、先駆種たちは種子という遺伝子により、機敏に地上

に出て、その後はすばやく成長するのである。「進化」ではなく、「遷移」を経てゼロに戻るといふ知恵が、森に永遠の命を与えた。

掟 廻りを待つ

木々は、一度、確保した場所をそう簡単には明け渡さない。光合成で生きる木々にとって、空間の確保が生命線だ。

空間が開くということ、木々は種子時代を過しながら、じっと待っている。空間が空くまで待ち続ける。それが森で生き残るための掟だ。自分の番が廻るまで、とてつもなく長い間待たなければいけない。

そして、ひとたび種子時代の困難を耐え抜いて成長した木は、そう簡単には、場所を空けはしない。樹木の生命戦略の優れた特徴は世代を継ぐために二つの方法を持っていることだ。

一つは種子散布により実生から成木になること。もうひとつはクローン力によるものだ。雷に打たれたり、人に切られたりしても多くの樹木はそれで生命がなくなるわけではない。すなわち親株(主幹)に成り代わり子株(萌芽枝)が育つ力である。これが [萌芽更新] という【再生循環力】である。これこそ他の生物になく、木々にしか与えられていない特別な能力、クローン力という世代交代術だ。

これにより、木々はひとつの場所で、長く多くの遺伝子を散布しつづける。しかし、形あるものは、いつかは崩れる。萌芽という若返りにも限界がきて、巨樹になっていく。最後の敵は自分自身だ。自らの重みが風や雪に耐えかねて、あるいは老化した身体に外敵が侵入して崩れ去る日がやがて来る。だが、ひとつの終わりは、ひとつの誕生だ。それが廻りということだ。そして、廻りがくるまで耐え抜いたものだけが、その場所を確保する。



氣(木)質という戦略

森、その世界にいる中心は誰か？ 当たり前だけれど、それはやはり木々なのだ。森という生命共同体では、その廻りの中心すなわちポンプとしての心臓が木々なのだ。

木々は太陽の光を浴び、土から雨を吸い上げ成長すると共に、木々はその成果を様々な生命に分け与える。一方、鳥や動物、虫たちも様々な方法で木々の子孫繁栄に手を貸す、そういう【廻り】がある。しかし、木々という生命が存在しなければ、何の廻りも起きはしない。木は、自らは、足も持たず、動くことはないが、様々な戦略を仕掛けて、森の生命を引き寄せ、役割に従って動くように指令する。自らは足を持たぬ木々が森の生命を、時に人間をも動かすのだ。氣質を武器にした木々の優れた生命戦略と木々にしかない不思議な力について紹介しよう。

木は置物じゃない。意思表示を持って生きている

ハリギリの木。照葉樹林や杉林の比較的明るい場所で成長する落葉樹。パイオニアプランツ(先駆種)のようなフロンティアスピリッツの持ち主。



新芽は、天ぷらで食することができる。鋭い大きなトゲは葉を食べようとする鹿からの防衛策。木は、意味なく、トゲを出したりしない。外敵からの防御という意味を持っている。高く成長して、葉が外敵に食べられる心配がなくなれば、トゲを出すことをやめる。トゲを出すのは余分な栄養を必要とするからだ。ハリギリは、鹿の攻撃を逃げるように、トゲを出しながら早く成長する。それは、木として、とても無理があることなので、樹木の中では、短命な方だ。トゲを出すこと以外に、相手の攻撃をかわす方法はなかったのか？

でも、それは言うまい。それもハリギリの氣質、それできちんと、遺伝子を継ぎ、種として繁栄しているのだから。木の〔いのち〕とは、木の形ではない。形あるものは、いずれは崩れ落ちる。しかし、形を失っても、遺伝子という情報の流れだけは絶やさない。永遠に廻る遺伝子の流れそのものが〔いのち〕なのだから。木はそういう生命戦略に長けている。ハリギリは、美味しいだけでなく、桐の名がつくように材としては優良だそうだ。

アオキさんの資源戦略

アオキさんは、どこにもたくさんいる。山、公園と庭木とどこでも生育力がある。どこにでもいて平凡と見える常緑の低木であるが、実は、生き方は平凡ではない。そこには、アオキさんの個性的な戦略選択がある。

アオキさんの葉も鹿の好物である。鹿の好きな葉といえば、タラノキやカラスザンショウ、ハリギリなどの落葉樹でいずれもトゲを持つ。栄養をトゲに回して、鹿から防御しようとしているのである。ハリギリ、カラスザンショウは鹿から逃げるように、高木になり、成長すればトゲを出すのをやめるが、それでも無理がたたって、樹木としては短命である。

ところが、アオキさんはトゲなど出して尖らず、しかも低木のままである。アオキさんが選んだ道は、高木になることでも、トゲを出すことでもない。群落を作り繁殖にエネルギーを回すことであった。低木は、確かに寿命は短い、樹木の〔いのち〕は一つ一つの木の形の保存にこだわっているわけではない。基本は遺伝子情報という記憶の流れを遮断せず種族として繁栄することにある。

アオキさんのエネルギー資源の配分は、群落を作るほどの繁殖力にある。これがアオキの気質という戦略だ。この繁殖力を裏打ちするものは萌芽というクローン力だ。多くの樹木は主幹が、倒れたり傷ついたりした時の保険として「ひこばえ」という予備の株を持っている。アオキさんの場合は、低木の常緑だから自らの繁りの重みや雪折れで枝が地面に接しやすい。なんとその枝から根をおろしてクローン生命を増やしてく力があるのだ。この独特の萌芽更新が、アオキさんが、鹿にも負けず繁殖できる秘密である。大事なことは、限られた栄養資源のエネルギー配分をどのように取捨選択するかという戦略である。平凡と思えて、身近にある木ほど、種としての卓越した戦略を持っているのである。

動ぜずして、他力を回す

動くことができない木々は自らの生き残りと遺伝子の存続をかけて、時に風を、時に菌を、時に虫を、時に鳥を、時に動物を、そして時に人間をと、あらゆるものを利用する。敵の敵は味方的な関係もある。

つまり木は、それぞれに必ずパートナーとなる生命やモノが必要なのだ。そして、森のあらゆる生命も木に頼って生きている。そうやって森はできている。

木々は、驚くべきことに、種子調整や受粉活動の制限などを通じて、パートナーの個体数調整まで行う。

どんぐりの木は種族の生き残りのために、種子調整を通じて、森の生命を操る力を持っている。タヌキ、野鼠、リスなど彼らは皆、どんぐりの種子散布者であるが、捕食者でもある。捕食と散布のバランス、それが大事だ。物言わぬ木が、周辺の木々と連携して、どんぐりの実の豊作不作を決めるのであ



る。これを「どんぐりの一斉同調」という。

木は、自らは、力を振るうというエネルギーを使わず、氣を読んで、ある時は他者を倒し、ある時は味方にする。森の生命は木の意思により甚大な影響を受ける。森の生命は調子に乗ってやりすぎると因果応報の世界を知ることになる。

クヌギコナラ族の捨て身の戦略

木々の世界には宿命的輪廻の法則がある。常緑樹が落葉樹に取って代わる時代が来る。これを【遷移】と言う。例えば、カラスザンショウの木は落葉の陽樹である。彼は森を作り始める先駆者としての役目が終われば、いつかはその居場所を、ドングリというロングセラー商品を持ち、抜群に経営感覚のよいカシ、シイなどの常緑照葉樹の陰樹に明け渡さなければならない。その落葉樹から常緑樹への遷移という宿命的輪廻を打ち破った種族こそが、落葉樹であるクヌギコナラ族である。

クヌギとコナラはともに落葉樹である。ともに落葉した葉や小枝は肥料として使われた。幹は大きな熱量を持つ最高の薪エネルギーであった。薪炭エネルギーとしてはカシやシイもこれに適する堅い木で、これをカタギという。クヌギとコナラは落ち葉と小枝を肥料として使えるという点で、日本の農的生活を支える代表的樹種となった。カタギの雑木たちの中で、里山の【優占樹種】の座を守り貫くためには、人間たちに利用価値だけではない魅力をアピールすることが必要であった。いくら、利用価値があっても、一代限りで終わってしまうような気難しい木では里山の優占樹種にはなれない。人に未永く愛されるためには、子孫の代を継いでいく力が必要である。

クヌギコナラ族は、樹木にしか与えられていない特別な能力すなわち若返り再生力に優れた能力を持っていた。

親株が切られても、子株がすばやく親株に成り代わり、再びの生を繰り返すのである。これが萌芽更新力=クローン力だ。



クヌギコナラ族はこの萌芽更新に優れた力を持っていた。人間はこの萌芽更新力に着目し、持続可能な薪炭エネルギーとして利用してきた。薪炭として適切なサイズに合う樹齢で切られ、萌芽更新を繰り返した。クヌギは人間に切られることによって、里山における不動の地位を築いたのであった。

クヌギコナラ族は、同じドングリ族でもライバルの常緑樹であるスダジイよりは人気のないドングリという商品を持ち、エネルギーコストなどの経営総合力でも劣っている。彼らの栄華は人間という特定のターゲットに絞り、葉から枝、幹まで商品化するという捨て身のマーケティング戦略による勝利で実現したものであった。

そのことによって、落葉樹の宿命を克服して空を覆い、豪勢を張るシイの木などの常緑照葉樹の独占的天下を許さなかった。

多くの森で常緑樹の極相林への【遷移】が食い止められた。この遷移の食い止められた状態を「里山」という。

そして、クヌギコナラ族が里山で隆盛を保ったというわけだ。

クヌギコナラ族は、森が常緑樹の独占【木】業体連合となることを、人間を利用して防いできた。その結果、「里山」は、落葉樹と適当な樹木の大きさにより適度な明るさが保たれ、多くの樹木や植物に発芽のチャンスが与えられて豊かになり、子ども達や鳥や虫たち、蝶たち、動物たちなどいろいろなお客さんが訪れるようになった。これを【生物多様性】という。多くの日本の山は、このような木々と人間の協働により、この独特の生態系を保ったのであった。萌芽力というクヌギコナラ族の若返りの知恵が、「里山」という日本独特の森林文化を牽引した。

解説 ~ 里山とクヌギコナラ族 ~

里山林の社会は木々の【自立力】を保ちながらも多様な種が集う【共生力】を兼ね備え、持続的な種の【再生循環力】を發揮して、明るい【木(気)力】のもと参加者の生命体に生活していけるだけの【経済力】を与えることとなったのである。これを【持続的な生命共同体】と呼ばずしてなんと言おう。

これが里山文明の【核】である。

クヌギコナラ族は、人間を商店街の会長にすることで、若さを保ち魅力がある繁華街、商店街として賑わう共同体をつくった。そして、その中で、彼らは主役を張り続け、みんなの人気者になった。

極相林の覇者シイノキの自立と尊重の哲学



シイノキは極相林の覇者だ。シイノキ林という純林をつくる。

それぞれの木の一つ一つは、自立し、太く高く成長し純林をつくる。そこで、空を見上げれば見事なまでに葉が重ならず、まるで、ジグソーパズルのように空間を仲良くみんな分け合い占拠していることに気づく。

シイノキの葉は決して重ならない。そこには、チームとし

て、重複して光を取り合うという無駄をなくすことにより、それぞれが自立し、種族として発展していくという戦略がある。シイノキを極相林の覇者に押し上げた要因のひとつが「重ならないという尊重」の哲学だ。

木々は三次元の世界に生きる

人間は、食物や水を身体に補給して、生活のためのエネルギー資源をとるとなると、二次元にしか生きられないので、場所の取り合いで度々争いを起こす。木々は三次元の中ですべてを完結して生きるから、人間よりずっと多くの多様性を受け入れる。シイやカシなどは高層の世界で場所を確保する。その下にヒサカキやカクレミノの中層世界が存在し、その下にアオキな



などの低層世界、最も低い世界がシダや草本類の世界である。中層のヒサカキは高層のシイやカシと争おうとはしないし、シイやカシもヒサカキなど相手にしない。これが三次元で生きるという木々の知恵だ。生き残り戦略だけから見れば、人間も他の生命も木々の知恵、戦略にはかなわない。二次元にしか生きることのできない人間は、都度々、争いも起こすけれど、共生と共有という知恵も持っている。同じ時間、同じ空間、同じ景色、同じ食べ物、香り、見て感じて補い支え合うこと 愛

サカキさんの譲らず生き抜く戦略

空間を確保すること、それが光合成で生きる木々の競争の宿命だ。パイオニアとして他人より早く大きくなって場所を確保する。それも、ひとつの生き方だ。

だが、それだけが勝ち抜く道ではない。そこに木々の戦略的知恵がある。大量の光で早く成長しなくても、呼吸というエネルギー消費を抑えれば、多少の暗さでも生きていける。省エネだ。経営効率のよさの蓄積で、大きくなり、パイオニアベンチャーを駆逐していく。そういう木々が、空間の支配者すなわち優占【木】業となる。

さらに大胆な戦略がある。はじめから、大きさを捨て、エネルギーコストを極限まで削る。狙うは、高層空間でなく、中層という隙間だ。しかも絶対にこの隙間空間は、明け渡さない。

中間を支配されれば、もはや後発には発芽成長するチャンスはない。高層の影に隠れて競争せず。下のものにはどこまでも強く譲らずに生きていく。これは高層を支配するもの達にも、安定的栄華をもたらす。

サカキは、安定的ステージの森でいやらしいほどの黒子の個性で生き抜く。人間は太鼓持ちとか、虎の威を借りる狐とか言うかもしれないが、それはサカキの戦略的気質で、彼の生き方には人間が言う好き嫌いとかは何の関係もない。

アカメガシワの四次元埋土戦略

山火事などで森が明るくりセットされた状態で、旺盛なフロンティア精神で発芽して、すばやく成長していく落葉樹のアカメガシワ。彼は、パイオニアプランツ(先駆種)の旗手だ。

やがて森が、自らの葉や、様々な樹木で込み合い太陽の光が不足してくると、呼吸をひそやかに押さえて、エネルギーコストを切り詰めて耐陰性に優れた、常緑樹が幅を利かせてくる。常緑樹に囲まれたアカメガシワたち落葉樹は、静かにその場所を譲り始めて、やがては森から駆逐される。この落葉樹林から常葉樹林への移り変わりを「遷移」という。

長い自然界の歴史では、山火事や洪水、台風、さらには人による伐採、山焼きなどで、いつかはこの常葉樹林帯も、その形を失う時が来る。再び明るくなった森から、アカメガシワが旺盛なフロンティア力で森づくりを牽引する。前時代の先駆種が埋め込んだ種子による子孫だ。彼らの種子は、森が再び明



るなくなった時に発芽するよう仕組まれていたのだ。何百年も眠ることのできる種子により、森は永遠の命を繰り返す。ここに、成長ではなく、若返りをするという木々の知恵がある。

陰陽の道～サンショの木

サンショ(ウ)は落葉樹である。多くの落葉樹は高い光合成率を求めて明るいところが好きな陽樹である。常緑樹は、それほどの日照を求めない代わりに、呼吸というエネルギーコストを抑える。このような耐陰性の高い樹木を陰樹と言う。

陽樹に常緑樹はないが、陰樹には落葉樹がいくつかある。それらの木は、低木である。サンショもそのひとつである。

陽あたりの悪い落葉樹の陰樹たちは、葉を半年しか使わないので、光合成と収支を合わせるために極限までエネルギーコストを減らす必要がある。それには身体をできるだけ小さくするしかない。しかし、小さくて済むということは、大木たちと競う必要がないという最大の強みでもある。そこに彼らの生存余地が生まれる。

サンショは小粒でもピリリと辛い
～ 小粒を侮るべからず ～

シイノキとケヤキどちらが優占【木】業か～リスクとコスト管理



木々は、子孫を残すために多くの鳥や動物など他の生物の手を借りる。お客さんを招き入れるのである。木々は他店に負けまいと魅力ある個性をアピールして競争している。多くのお客さんに来てもらうためには、魅力ある商品を用意しなければならない。それが美味しい果肉であったり、きれいな色であったり、蜜であったりして、時には香りでお客さんを釣ったりもする。いろいろなお客さんを惹きつける木は、やはり、森の中でも優勢種となっていることが多い。

カラズンショウの木はモンキアゲハや鳥には人気である。アゲハチョウはこの木の葉に産卵する。カラズンショウの実には鳥に人気である。チョウや蛾の幼虫は葉を食べてしまうが、幼虫は鳥の餌にもなるので、樹木としては、鳥に来てもらうための道具として利用できるという戦略だ。そうでなければ葉はみんな食べられてしまう。カラズンショウが仕掛けるワナだ。

敵の敵は味方である。それが森の世界だ。カラスザンショウは鳥にご褒美としておいしい実を持たせる。そして、その実は鳥の糞を通じて種子として散布される。アゲハチョウの幼虫、アオムシ君のほうも、蝶になって生き残れば、受粉という形で木の子孫繁栄に貢献してくれるという寸法だから、木の生命戦略はしたたかだ。

ただ、いかによい商品を持っていたとしても、種族として優占【木】業のように森の中で一定の勢力を張り長く生きていくためには、商品力だけでなく経営力が必要だ。

カラスザンショウは、よい商品をたくさん作って繁盛はしているが、樹木としては短命だ。急成長はするが、条件は多量の光というエネルギーが供給され続けることにある。知らぬ間に常緑照葉樹に囲まれると呼吸とエネルギーの収支が合わず衰退に向かう。

優占樹種となって【木】業を発展させる戦略とは何か。それは、魅力のあるよい商品を作るといふこととともに、エネルギーコストをできるだけ抑えて無理のない成長をすること、すなわち経営力のバランスを取ることである。

人間が高級木として価値を認めるケヤキの木は自然界ではどんな立場か。ケヤキの木が生きていく特徴として、



早く成長することができる
大きく成長することができる
長生きである

と三点セットで良いことづくめのようだ。しかし、人間の価値観が自然界の中で必ずしも受け入れられるわけではない。

自然界の中では大きくなるというのはリスクを伴う選択だ。

たくさんの水を吸い上げなければ大きい身体を維持できないといふことがあるので、条件がよくないといけな。自然界の中では、図体の大きなケヤキを支えるための水分が充分にあるような恵まれた条件はなかなかない。種子も風まかせという有様で、しかも母樹が大きいので、その周囲に散布された種子は日照が不足で育たない。ゆえに大きく早く成長し、長生きするDNAを持って生まれた木であっても、エネルギー効率も悪く、立地も選りすぐりで、種子は風まかせでば撒くだけの魅力ある商品を持っていないなら、一大限り立派な木になったとしても、後継者づくりには不利であり、種族として繁栄することは極めて難しいのである。



シイの木は南房総において【優占】
【木】業である。多少の日蔭であつても光を取り込むエネルギー効率が高い。その上、ドングリという魅力のあるよい商品作りでお客を集める。ドングリは鳥にもタヌキにも野ネズミに対しても普遍的人気商品だ。鳥は糞を通じて種子をばら撒いてくれる。小動物たちはドングリを食べてしまうが、必ず食べ残しもするので発芽のチャンスをもたらえる。シイノキは抜群の経営感覚を持っているということなのである。こういう樹木が【優占】【木】業となって森の中では純林をつくり繁栄していくのである。

自然界では不利であっても、ケヤキのもって生まれ氣質は、シイノキのような生き方を許さない。ケヤキにはケヤキの氣質がある。そして、そ

の価値を認めるパートナーがいる。

ケヤキの硬い幹と木目の美しさを高級木として愛でる人間である。ケヤキは屋敷林の財産として繁栄してきたし、都市でも、箒型の美しい樹形から公園林や街路樹として活躍している。

極相林の覇者シイノキから～「木は氣なり」

氣のつくものはすべて、木の氣質あるいは、木々が集まって出来る森の性質になぞらえることができる。木の氣質でいえば、氣が強い木、氣が優しい木、氣が急いで生き急ぐ木など。パイオニアプランツのような日当たりを好む陽樹と耐陰性の強い極相林の陰樹は氣が合わない。荒ぶる自然の神を鎮撫する荒神の森は氣難しい土地。悪い森では、氣が詰まる、氣が滅入る、氣が遠くなる。

森に大木の倒木や集団倒木など大きな変化が起きれば、氣が変わる。神社の森では氣が高い、氣が通る。よい森には氣力が漲る。氣とは、すなわち木の氣質のことである。

外的環境へ合わせる「進化」より、己が本質である氣質という特徴を研ぎ澄ますことを選んだ木々。頑なまでに、己が氣質を信じて生きる様こそ、木々の誇り「氣高さ」なのである。

木は氣なり

あとがき

問いかけ

木は、生きている。置物ではない。人間と同じ、生命なのだ。

生きているから、生命のエネルギーの気を発している。何百年・何千年とも生きる力強い気の塊なのだ。だから森林浴は気持ちが良いし、逆に森によっては時に鬱蒼、不気味でもある。

そんな木の世界を知り、木の生き方を学び自身に照らし合わせてみたら、「自分の命を生きる」という本来の自然の生き方を感じ取ることができませんか。

木の生き方に、ちょっと自分の気(気質)のことを照らし合わせてみたら、自分の気が見えてきませんか。木に例えて自分のこと、家族のこと、友だちのこと、会社のこと、社会のことを思い浮かべてみたら、今までと違ったその気になるかもしれません。

木々の生き方を学んだ時、現代の常識とは少し違う自然に根ざして生きるというシンプルな生き方に目が行きませんか？

国土の5割～7割(時代により違います)を森林が占めている日本は、木使い(気遣い)の文化であり、木々の世界とともに歴史を刻んできました。

人間の身の回りの自然とは、木々という生態系の頂点に立つ生命社会の賑わいで、そこに人と「自然」の垣根は存在していませんでした。明治期以前、日本には英語の Nature に相当する言葉が存在しなかったのです。

それほど、人は自然のサイクルに身を任せ、自然と同化して生きて来たのです。

ここで、話を木から「雑草」に転じてみましょう。

雑草というのも、里地里山の風景の一つです。また、この「雑草」という言葉も、「自然」と同じように存在していませんでした。「雑草という草はありません」と、仰せられたのは昭和天皇ですが、実は、明治期以前は、「雑草」という言葉すらなかったのです。雑草とは英語の「edible plants」=「食に適する植物」以外のものをまとめていったものです。

ところが、それはあくまで欧米人から見たものの植物です。実際には、欧米人が食に適さないという「雑草」も多くは食されていたそうです。ネコジャラシなんかも粟の原種だから、飢饉の時は食されていたそうです。多くは、米や麦など穀物の原種ですから、食べられるわけですが、何よりも、このものたちがいなければ、お米もお餅も、お煎餅も、存在しなかったわけですから、「自然の中に必要のないものはない」ということなのです。

「雑草」たちもまた「遺伝子の流れ」という、普段見えないものを見ること

を教えてくれているのです。

欧米人たちには見えなかった食以外でも、「雑草」たちは生活の中にたくさん入っていました。多くは漢方や染物にも使われたでしょうし、カラムシなんかは今でもカラムシ織りという立派な織物になっています。

人間に必要なとって「自然」をチカラで、ねじ伏せるのでなく、「自然」のチカラを引き出し味方にするのが日本の文化です。「自然」とか「雑草」とかいう人間との区別用語をつくらなかったのが、日本の強みです。そんな普段「見えないものを見る力」も生きていくには大切なことではないでしょうか。実は、現代に生きる日本人たちの身体のどこかにもそういう力は眠っているのではないのでしょうか。

だから現代人でも里山に郷愁を持ち、そこに入れば DNA の奥深いところで響く何かを感じるのです。私たちの先人達は身の回りの自然に垣根を作らない一方で、巨木が生い茂るお山を神の領域である奥山あるいは深山(みやま)として畏怖したのです。神様の領域である神社も巨木を境に人の領域と神様の領域を分けました。生命戦略においては、どの生命体も木々の持つ力には敵わないのです。何百年、時に何千年と生きる強い気、多くの遺伝子を残していく力、そして、自らの若返り再生というクローン力、そんな力を持つ生命体はどこにも存在しないのです。私たちの先人たちは木々の力をよく知っていて、その力を上手に利用してきました。

木々や森が日本の共同体社会の構造や人々の精神の形成、健康リズムに計り知れない影響を与えたのは間違いありません。

その上で、この【じゅりんの書】は、読む人にいくつかの問いかけを含蓄させています。

まず、冒頭の遺伝子の廻りですが、これこそが地球を地球であらしめているという意味で冒頭に記しました。それは私たちが所属する地球のコミュニティ全体が直面している深刻な問題ですが、それはあえて書かないことにしておきます。

それから、木々の生き方をあらためて鑑みる時、現代に生きる我々の価値観と較べてどうなのかということ。一体私たちの現代的価値観・生命観・モノの見方はいつごろ形成されてきたのでしょうか。

それが何なのか、是非考える機会になればよいと思います。

さらにもうひとつ大事な問いかけがあります。あまりにも優れた生命哲学と戦略を持つ木々に比して私たち人間は、どのように優れた生きる気を持っているのでしょうか。

自然社会の中における共生とは、激しい競争による淘汰と因果による結果で成り立つ宿命的なものです。

それはさながら現代の資本主義のようなものですね。

そして、その中で様々な競争や困難を乗り越えて生き抜くこと、それはそれでとても大切なことです。【じゅりんの書】は、その部分でもきっとお役に立つでしょう。

しかし、いくらシンプルがいいといっても、競争と因果の宿命に従って生きるだけでは、人としてあまりにも殺伐でシンプル過ぎやしませんか。【じゅりんの書】は、人間にしか与えられていない特有の生き方、それは何かということ問いかけて終わりたいと思います。

【じゅりんの書】をお読みいただきありがとうございました。

心豊かに生きる「気」があなたに流れますように

2014年12月吉日
ガンコ山マスター
平賀 義規

じゅりんの書
第1版 2014年3月
第2版 2014年12月



ガンコ山文庫

ガンコ山ツリーハウスヴィレッジ
千葉県南房総市大井地山中
<http://www.treehousemaster.com/>
無断転載・引用・複写等を禁じます。